

公害・労働災害・医害の精神医学的側面

—戦後精神科医療史覚え書き（その1）—

岡田 靖雄

青柿舎（精神科医療史資料室）

わたしは2002年にだした『日本精神科医療史』（医学書院）の「あとがき」に，“15年後に戦後日本精神科医療史をまとめたいたの希望をいただいている”とかいた。今になってみると，戦後に精神科医療・精神医学はあまりに多岐に分化しすぎた，またわたし自身あまりに多くのことを経験した，ということをつくづく感じている。それらを一人で一本にまとめることは不可能だろう。戦後医療史からいくつかの主題，側面をえらんで，それをかきのこしておくことは可能だろう。今回をその第1回の試みとしたい。ここにとりあげるのは，公害，労働災害，医害である。戦争を超大規模の公害とみなすことはゆるされよう。医害とよぶのは，いわば無茶な医療，無茶な人体実験である。

第2次大戦後遺症として，原子爆弾被爆者の精神医学的後遺症が充分にまとめられておらず，被爆者の子の小頭症の問題が未解決である。沖縄戦，東京大空襲については，遠隔後遺症がいま注目されている。

1955年6-8月に岡山県を中心に森永砒素ミルク事件がおこり，1969年になって中枢神経系を中心とする慢性後遺障害があきらかにされた。

1956年5月水俣病第1号が報告され，1965年5月には新潟県で同症例が，1961年3月には胎児性水俣病が確認された。水俣病の全容はまだ解明されていない。

1956年9月，新潟精神病院で入院患者149名に対し新潟大学桂内科によるツツガ虫病毒注射の実験がおこなわれたことがあきらかにされた。8名死亡。

1963年11月三池三川鉱で炭じん爆発がおこり，458名死亡。800名をこすCO中毒後遺症の集団検診は1978年からおこなわれた。

1966年3月，岩手県立南光病院（精神科）で抗てんかん剤エピアジンほかの人体実験がおこなわれて，3名が死亡し20名に副作用のでていることがあばかれた。

1971年3月の『精神神経学雑誌』に，臺弘東京大学教授らが松沢病院在職中の1951年にロボトミーのさい採取された脳組織をもちいて生化学的研究をおこなったことが，人体実験として告発された。向精神薬導入までひろくおこなわれていたロボトミーの実態は充分に解明されぬままにおわった。充分な根拠のない脳切除，その他の治療実験も充分に照明されないままになった。

上記のほか，カネミ油症，上記のほかの砒素中毒，2硫化炭素中毒，職業病としての慢性CO中毒などの問題もあった。

全体を通じると，1) 大規模災害の全体像が解明されていない，2) 後遺症ないし慢性中毒が初期には否定されていたものが，実はおおきな問題であった，3) 精神面の被害が軽視されていた，4) 病態の把握について精神科側と神経内科側とで見方のことなることがあった，5) いくつかの問題は労働運動弾圧のなかで暴露された，などの点が指摘される。

1964年から多発したスモン，1970年7月にはじまった光化学スモッグにおいて，原因解明の初期に心因説がとえられたことも指摘しておくべきだろう。安易な心因説は事態解明をさまたげるのである。

精神病院に多発した火災（患者焼死），患者虐待も医害にはいるが，これらは別にあつかう。